AROUND THE WORLD

環境に優しい言語学のすすめ[1]

呉人 恵　Kurebito Megumi　（富山大学人文学部）

5 掘り出そう，無印良語！

ツンドラに生きるトナカイ遊牧民コリャーク

かねがね不思議に思っていることがある。英語教育のための雑誌の冒頭にこんなことをいきなり書いたら叱られてしまいそうだが，平にお許し願いたい。なにがそんなに不思議かというと，なぜかくも英語学習者の人口密度が高いのかということだ。

学校教育で義務づけられているからと言われてしまえばそれまでである。国際語として通用しているからと言われれば返すことばもない。だが，しかしだ。なにしろ世界には6,000とも7,000とも言われる膨大な数の言語が存在するのである。それなのに，英語にばかり学習者が殺到する。私みたいな人口密度の超希薄なシベリアのツンドラでただ一人，少数民族の言語を掘り起こしている人間からみれば，「お～い，みんな～，こっちにも楽しい言語はあるよ～，なんでそんなに狭いところにかたまっているんだよ～」などと声をかけてみたくなるほどの，これはただごとではない蝟集（いしゅう）ぶりなのである。

もちろん，英語が政治的，社会的，経済的に「役に立つ」言語であることは否定しない。しかし，それは言語自体に本来備わっている価値というのとはちょっと違う。言語自体としての面白さというならば，どんな言語だって例外なく面白いし，個性にあふれている。たとえば，私たちがあたりまえに思っている「語」ひとつとってみても，その中身をのぞいて見ると，実に多種多様だ。人間にもXSサイズからXLサイズまであるように，言語にだって，中国語のように1音節の短い語が多いものから，エスキモー語のように語幹にたくさんの接尾辞がくっついてとんでもなく長い語を作るものまである。

生活に役に立つ「語学」の必要性は百も承知しているつもりではある。しかし，どんな言語にも面白さを見つけられる「言語学」のまなざしって，実は人生を限りなく豊かにしてくれるんだということも強調しておきたい。

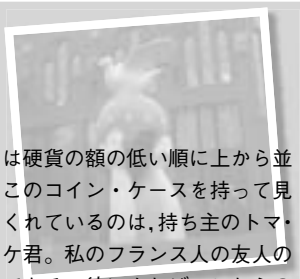
そんなまなざしで見てみると，私が取り組んでいる話し手5,000人に満たないコリャーク語という小さな言語だって，なかなかどうして，魅力的な言語ではないか。ロシア語への急速な同化が進むなか，コリャークの人々にすら今では「役に立たない」言語になり果てようとしているが，こんな豊かな言語をおめおめ放っておくわけにはいかない！というのが，私のコリャーク語に取り組む原点である。

次回はそのコリャーク語の魅力の一端を紹介したい。

表紙写真について

EU：多様性の統一

根岸 雅史　Negishi Masashi　（東京外国語大学）



EUには現在15か国が加入している（今年の5月1日でさらに10か国が追加される予定）。もともと異なった国の集まりであるが，「ヨーロッパ」の名の下にひとつの統一体として機能し始めている。左上の写真は，EUの図書館の裏庭で私が撮ったものだ。EUのトレードマークである青地に黄色の星の入った球体には，平和を象徴する白い鳩がとまり，それを様々な色をした人の手で支えるオブジェである。

以前のヨーロッパでは，国境を越えるごとにフラン・マルク・ペセタ・ギルダーなどと両替をしていた。しかし，これも今は昔の話し。どこへ行ってもユーロですむのだ（とは言え，イギリスなどはまだ通貨統合には反対しているために，まだポンドを使っている）。ユーロになったために，当然どこでも同じ貨幣を使っていると思いきや，同じなのは紙幣だけで，硬貨の図柄はそれぞれの国ごとに異なっている。下の写真は，その硬貨を集めるためのコイン・ケース。横の列はそれぞれの国が，縦の列は硬貨の額の低い順に上から並ぶ。このコイン・ケースを持って見せてくれているのは，持ち主のトマ・ジャケ君。私のフランス人の友人の息子である。彼によれば，これらの中には，ほとんど発行されていない硬貨もあるために，それらを手に入れるには，ネット・オークションなどで高い「お金」を出して買わなければならないとのこと。この時点では，まだ埋まっていないところが何か所かあった。次に再会するときには，すべて埋まっているだろうか。